



ミンガラボーター

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

延期や中止相次ぐ 協会活動に大きな影響

新型コロナ

新型コロナウイルスの世界的な大流行で、協会の医療支援活動も大きな影響を受け、予定した事業の延期や見直しが相次いでいる。

協会の西山央子理事が設立の奨学制度「あかね基金」をもとにしたミャンマーでの准助産師育成計画は、エーヤワディー管区のチャウンゴン郡区の農村出身者を対象に5年間で100人の研修を修了。今年から新たに同管区のミャウンミヤ郡区で3年間に60人を育成することにし、その1期生の始業式を4月に予定していた。日本—ミャンマー間の

航空便欠航で、協会から事前の打ち合わせや始業式に出かけられず、始業を延期した。いつスタートできるか見通しは立っていない。若い医師らを日本に招いて大病院などで研修してもらおう事業は、協会の重要な活動。岡山大病院と倉敷中央病院で3カ月間の研修を終え、4月に帰国する予定だった病理学、核医学研修の医師ら3人はビザを延長、5月初めにやっと帰

国することができた。また3・4・5月にそれぞれ1人ずつ新たに岡山大病院で研修することになっていったが、来日できない状態が続く。4月にはヤンゴン第一、第二、マグウェー、マンダレーの4医科大学の3年生12人が岡山大学医学部3年生の授業に参加し、1カ月間、病気の基礎的な仕組みについて学ぶはずだった。今年で5年目になる学生交流だが、初めて中止に。4月下旬に岡山を訪ねる予定だったヤンゴン第一、マンダレーの両医科大学長の歓迎行事も取りやめた。

日本からの支援で、ミャンマーで初めて医療機器管理人材(メデイカルエンジニア)を育成中のプロジェクトは岡山大学と協会が関わっている。年間約20人ずつ5年間で約100人を育てる計画は今年が3年目。現地で教育に当たる日本臨床工学技士学会などから派遣の講師が渡航できず、中断している。また将来、ヤンゴン医療技術大学で開講する「メデイカルエンジニア学部」の教員予定者が日本の大学院課程に入学することになっていったが、その来日も延期された。

新型コロナウイルスの収束が見通せないなか、協会の岡田茂理事長は「今後予定している事業も延期や中止せざるをえないかもしれない」と話している。

講演や発表、助言

岡山大病院の医師

ヤンゴンで1月に開かれたミャンマー医学研究大会に岡山大病院の医師ら8人が参加し、講演や発表、助言をした。

大橋俊孝教授(医化学)が「次世代再生医療にむけての基礎研究プロジェクト」の題で講演。シンポジウムでは土井原博義教授

(乳腺・内分泌外科)と平成人、岩本高行両医師が乳がん検診について、萩谷英大准教授と後藤和義医師は感染症について、ミャンマーの医師らと共同発表した。2月には岡山大病院の木股敬裕教授(形成再建外科)が協会の理事らとグループ5人がヤンゴン総合病院で手術指導をした。

岡山学芸館 医科大や病院視察



岡山学芸館高校(岡山市)の生徒らと「寄付クリニック」のヤンゴンの「西山堅クリニク」の母子センター

岡山学芸館高校(岡山市東区、森健太郎校長)の生徒12人が去年12月に1週間、ミャンマー各地を研修旅行した。吉岡希裕、音田高志両教諭に引率された生徒は当時の1年生10人と2年生2人。全員が医療系への進学をめざす。

最初にマンダレー西方の日本人医師が運営する慈善病院で活動について説明を聞いた後、太平洋戦争で亡くなった多数の日本人兵士の慰霊塔を訪れて献花した。マンダレー医科大を学長の案内で視察、マンダレー総合病院の救急施設を見学した。ヤンゴン総合病院も視察、院長の説明を聞いた。また寄付クリニックを見学した。



植えた桜の苗木に水をやる丸山市郎日本大使(左)と見守る村長と子どもたち。チャウス村

日本から陽光桜 寄付小学校に植樹

協会を通じてミャンマーの山岳地帯に寄贈された2つの小学校に1月、日本から届いたヨウコウザクラ(陽光桜)の苗木が5本ずつ植えられた。友好のしるしとして、やがて鮮やかなピンクの大輪が校庭を彩ることになる。

東京のNPO法人「地球元氣塾」が2017年に寄贈した小学校と、協会の西山央子さんが16年に贈った「あかね小学校」。どちらも8千以上の仏像がある「ピンダヤ洞窟」で知られるシ

ヤン州ピンダヤのダヌー自治区の小さな村にできた。ヨウコウザクラは戦時中、青年学校の教員だった愛媛県の高岡正明さんが戦後、戦死した学生の慰霊のために作り出したサクラ。日本の代表的品種ソメイヨシノに由来するアマギヨシノ(天城吉野)と暑さに強いカンヒザクラ(寒緋桜)を交雑させた。息子の高岡照海さんが父の遺志を継ぎ、各地に植えている。

植樹式は地球元氣塾寄付の小学校であり、協会の岡田茂理事長、同塾の大津山八郎会長、和田まり子理事長ら4人や丸山市郎・駐ミャンマー日本大使、それに高岡照海さんから苗木を譲り受ける橋渡しをした逢沢一郎衆院議員(日本・ミャンマー友好議員連盟会長)が出席。同塾の出席者は子どもたちと玉入れや綱引きをしたり、オカリナ、ハーモニカで日本の歌「故郷」「さくらさくら」などを合奏したりして、集まった大勢の村民たちと一緒に楽しい時間を過ごした。

田中理事死去
協会理事の田中茂人さんが2月12日、急性心不全で死去した。80歳だった。協会発足時からの理事。岡山市医師会長や岡山県医師会理事を務めた。

永山積善会が寄金

岡山プラザホテル(永山久夫社長)のグループ企業でつくる奨学金制度「永山積善会」から1月、協会活動費にと150万円が寄せられた。

永山社長は協会理事。同積善会は2013年度から毎年寄せており、寄金の総額は1050万円にのぼる。

大使歓迎会に出席

ミントウ駐日ミャンマー大使の就任歓迎レセプション

が2月20日夕、東京のホテルであり、協会から岡田茂理事長と木股敬裕理事が招待されて出席した。日本ミャンマー協会の主催。新大使は外務次官からの転出で、会場では「ミャンマー政府の日本重視の表れ」という声が聞かれた。

寄稿

ミャンマー見聞

慶応義塾大学
文学部2年
生田 光

東京芸術大学
日本画専攻2年
画 武久 輝也

人々のたくましさを見た

「ミャンマーに行ってみない」。高校時代の友人の武久輝也君を介して、岡田茂先生から誘って頂いたのが昨年6月のこと。それが今年3月に実現、これは7日間の見聞記です。

3月のミャンマーは気温が上がりがちある時期と聞いていたが、到着時の体感はまだに日本の夏の夕暮れといった感じでした。

生きた信仰根づく

2日目。国内線でバガン遺跡観光へ。まず市場へ出かけ、その賑わいに驚きました。人の行き交いは激しく、見渡す限り衣類・食材・生活雑貨が並ぶ。私たちに土産物を買うとする女性たちは凄い食い下がりようで、その勢いに圧倒されました。

バガンはアンコールワット(カンボジア)、ボロブドゥール(インドネシア)



タンセイン先生

とともに三天仏教遺跡といわれる。シュエズイーゴンパゴダ、テイローミンロー寺院、アーナダー寺院を見学。ここで感じたのは、その後に見たミャンマーの遺跡全てに言えたことですが、人と遺跡の距離の近さです。立ち入り禁止区域がありません、手で触れたり金箔をはることが出来たりといった物理的な近さに加え、遺跡がその土地の人々にとつての集会場、教育現場、とすれば子供遊び場としての役割さえ担っています。もちろん熱心に祈りを捧げる人も多く、ただの儀式化された観光地となつてしまいがちな日本の神社仏閣とは違つて生きた信仰が根づいていました。

展望台から夕日に染まる美しいバガンの眺めは圧巻でした。3日目もバガンを観光し、遺跡の壮大さには驚かされました。小さきまごまごパゴダ(仏塔)が見渡す限り地平線のかなたまで点々と続く。遺跡内部は興味深い発見の連続で、時代も地域も違う異なる文化の間の共通点、差異、繋がりを感じました。加えてもう一つ大いに感銘を受けたのは、カンカン照りの太陽と、どこまでも続く大地と大空です。一日中歩き回れば体は日焼けし、全身が砂埃をかぶつて唇を舐めれば砂の味が。アスファルトとコンクリートに囲まれた生活を続けるうちに忘れかけていた、地面に近かつた幼い子供の時の感覚をふと思い出しました。

4日目は空路、タウンジー観光へ。イギリス人が避暑地としてつくつた街だけあつて、幾分か過しやすい気候で、小綺麗な店も多い。私はここで民族衣装のロンジーを購入して着用。非常に過ごしやすく日本でも着られそうです。次のカック遺跡のそばの昼食会場では、この遺跡を保護、管理している少数民族のパオ族の女性から伝統的な鉢巻きの締め方を教えてもらいました。カック遺跡は非常に幻想的でした。石畳の通路の両脇を埋め尽くす無数の仏塔、風が吹けばそこから風鈴の音。まるで神々の世界の道を歩いているかのような感覚に誘われました。5日目はインレー湖上の宿泊ホテルからボートで市場へ向かい、再びインレー湖上に戻る。タバコ作りや蓮の繊維から作る織物工場を見学、浮き島畑や漁の様子を見ました。足漕ぎ舟を片足だけで巧みに漕ぐ男性、自動車用エンジンを改造して動力としたボートを運



右 ミャンマーの若者。伝統のロンジー姿に今風の髪型
下 インレー湖上の釣り人



転する少年たち、水上であってもセルストークを始める女性たち。私が見習うべき生き抜くたくましさがこの国の人々にはありました。6日目も引き続きインレー湖上で、ファウンドーワーバゴダを訪問。過去・現在・未来を表す5人の仏陀の像は人々が金箔をはりすぎたために餅のような外見になっていましたが、それが人々の信仰の塊のように見えました。ボートの釣り見学、首長族の女性との交流、銀細工工房の見学、村の訪問のあと、国内線で再びヤンゴンへと戻る。

魅力はエネルギー

最終日。朝一番でシュエダゴンパゴダを参拝しました。最後となる仏塔訪問だったが、有終の美を飾るにふさわしい荘厳さでした。ただ豪華絢爛というだけでなく、賑わっている中心部から一歩離れてみると、そこは仏塔らしい神秘的な空気を纏つた空間でした。目に入るのは白い大理石の床と黄金の仏塔と雲一つない青空、聞こえてくるのは僧侶が唱える独特の歌っているような念仏、隣には熱心に祈りを捧げる女性。私も時間さえあればそのままそこに座り込んでしばらく物思いにでもふけりたい気持ちになりました。丸山市郎駐ミャンマー大使の招きで日本大使公邸で昼食をご馳走になり、夕食はイタリアン料理店で食べました。前日の夕食に引き続いて、ミャンマーで岡田先生と共に活動している現地の医療スタッフの方々も来てくださり、興味深い話を聞かせてもらいました。ミャンマーの旅は非常に思い出深く、特筆すべきは現地のエネルギーだと思えます。人々の活気のをせる技なのか、あの広大な平野や湖や空のをせる技なのか、ミャンマーにしていると、心の底から沸々と熱いものが湧いてきます。社会システムが非常に緻密に構築されているために、時に閉塞感に覆われる日本では感じにくいエネルギーなのかもしれません。それがミャンマーの最大の魅力なのだと今、振り返って思います。

編集後記

ミャンマー見聞記の生田光さんと武久輝也さんは岡山白陵高校時代の同級生で、武久さんは岡田理事長の孫です。旅行は総勢13人。現地で同行したタンセイン医師はかつてWHO(世界保健機関)の東南アジア責任者を務め、今はミャンマー国民健康財団理事長。医学生生の生田さんは一緒に旅で、多くのことを教えてもらったそうです▼2月に亡くなった協会理事の田中茂人さんと岡田理事長と私は62年前、岡山大学医学部へ一緒に入学しました。医療第一線の開業医、研究と学生指導の病理学者、そして進路を変えての新聞記者と、その後の歩みは三人三様。そんな異なる軌跡がまた一つに交わったのが14年前の協会発足でした。故人のおおらかな、飾らない、驕(おご)らない人柄が偲ばれます。(西崎)